令和６年９月 10 日

研修だより 33 号

普段の授業実践から

小笠原康晃

私が授業を参観させていただき、気付いたことをまとめました。

１年生国語の物語文の授業です。
青虫たちが葉っぱの上でえさを食べている場面を音読しました。
その後、磯野先生は
「「むしゃむしゃ」と「もりもり」、どちらがたくさん食べているようにおもうかな。」
と発問されました。
この発問は、子どもたちの深い学びに繋がる発問だと感じました。
国語の授業は、言葉に関する学習だと、私は考えています。
「むしゃむしゃ」と「もりもり」では、様子が違います。
どのように違うのか、子どもたちに考えさせようとしていました。
言葉の違いに興味をもつことが、子どもたちの学びを深いものにしていくのではないかと感じました。

５年生国語の話し合いに関する授業です。
遠足に行くなら、海がいいか、山がいいか、について担任の先生に提案するという場面設定でした。
そこで、自分ならどちらへ行くのか、その理由を含めて考えるという内容でした。
「今からは「じっくりタイム」です。自分でじっくり考えて意見をまとめましょう。」
牧野先生は、研究授業で取り組んでいる「じっくりタイム」と「わいわいタイム」を使い分けて、対話活動に繋がる授業をされていました。

どちらの先生も研究授業に繋がるような授業を日常的にされているのと感じました。

お互いの授業を見合っていくと、日々の授業で大切にしていることを感じることができます。
１学期と同じように、学年団を中心にしながら、授業を見合っていきたいと思います。
ぜひ、御協力をお願いします。